

ドイツ病理学会派遣報告書

東京大学医学部附属病院 病理部

深川 彰彦

このたび、日本病理学会の国際交流事業の一環として、ドイツ・アウグスブルクで開催されたドイツ病理学会に参加し、発表する機会をいただきました。私にとって、欧州の病理学会で自らの研究を発表し、現地の研究者・病理医と直接交流することは大変貴重な経験となりましたので、ここに報告させていただきます。

日本からは羽田空港を出発し、ミュンヘン空港まで約 14 時間の長いフライトでした。ミュンヘン空港からは鉄道を乗り継ぎ、ミュンヘン中央駅を経由してアウグスブルク中央駅へ向かいました。のんびりとドイツの街並みや田園風景を眺めていると、学会参加という目的を忘れてしまいそうになる瞬間もありました。

昨年度に英語での口頭発表を 4 度経験していたこともあり、今回の学会でも「いつも通りの発表をすればよい」と、当初はそのように考えていました。今回、日本から派遣された 3 名は、同一のセッションで発表するものと思っていました。日本からの参加者が同じ枠で並んで発表し、それぞれの専門分野から日本の病理学研究を紹介する。例えば、座長はシニア派遣の田中伸哉先生で、ジュニア派遣の安藤俊範先生と私はそのセッションで発表する。そのような場面を、出発前にはぼんやりと想像していました。

しかし、改めてプログラムを確認すると、私だけが別のセッションに組み込まれていました。さらに、私が組み込まれたセッションの他の演者の持ち時間は 20 分であった一方で、私の発表時間は 15 分でした。それを知った瞬間、のんびりとした気分は一気に吹き飛びました。その後は、15 分の中で最善を尽くそうと考え、「この学会で、この時間の中で、何を最も伝えるべきか」を考え直しました。セッションの他の演者は各国で活躍されている研究者であり、その中で見劣りしないように、また日本病理学会から派遣された発表者として、自分の研究内容を明確に伝えられるように、発表内容を大幅に改訂しました。3 日間でドイツ病理学会を十分に堪能できたかといえば、自分の発表準備に必死であったため、答えは必ずしもイエスではありません。しかし、この予想外の状況は、結果的にはややマンネリ化していた自分の発表を見直す大変良い機会になりました。

ドイツ病理学会総会は、日本病理学会総会と比べると、規模は一回り小さい印象でした。一方で、病理診断から分子病理、ゲノム解析、人工知能に至るまで幅広い演題が取り上げられており、各会場では活発な発表と討論が行われていました。国際的な発信を意識してか、多くの発表は英語で行われていましたが、メイン会場ではドイツ語によるセッションも開かれていました。会場内の書籍展示では、英語の専門書に加えてドイツ語で書かれた病理学書も多く並んでおり、国際化を進めながらも、自国の言語による診断・教育の文化を大切にしていることが感じられました。この点は、日本病理学会の取り組みとも共通しており、親近感を覚えました。

参加者向けのイベントも充実しており、懇親会に加えて、早朝のランニングやサッカーも企画されていました。学術的な討論だけでなく、身体を動かしながら参加者同士が交流する機会が設けられている点も印象的でした。早朝からサッカーを行うという発想には少し驚きましたが、学会を単なる研究発表の場にとどめず、参加者同士のつながりを深める場として捉えていることが感じられました。

発表後は、海外での動き方をよくご存じの安藤先生に連れられ、アウグスブルクの街を観光しました。ア

ウグスブルクの街は落ち着いた雰囲気、歴史を感じさせる建物と日常生活の風景が自然に共存していました。立ち寄ったスーパーマーケットに陳列されていたソーセージをはじめとする加工肉の種類の多さは、まさに出発前にイメージしていたドイツそのものでした。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださいました日本病理学会、ドイツ病理学会、国際交流事業に関わられた先生方および事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。また、今回ともに派遣された先生方からも多くの刺激を受けました。特に安藤先生とは多くの時間を一緒にさせていただき、海外学会での振る舞い方、移動や食事を含めた現地での過ごし方、そして英語で自然に交流する姿勢など、多くのことを学ばせていただきました。この経験を今後の研究、診断、教育、そして国際交流に活かし、日本の病理学の発信に少しでも貢献できるよう努めてまいりたいと思います。



写真左上：学会会場入口、右上：発表する報告者

右下：アウグスブルク街並み、左下：スーパーの加工肉